



Title	シモーヌ・ヴェイユの労働觀：〈呪われた労働〉をめぐって
Author(s)	宮川, 文子
Citation	Gallia. 1994, 33, p. 51-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8923
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シモーヌ・ヴェイユの労働観 —<呪われた労働>をめぐって—

宮川文子

「労働は [...] 人間存在そのものの本質的な側面をなしているのに、その本質を根本から問う試みが乏しい！」と大沢正道氏は指摘しているが、シモーヌ・ヴェイユはまさに、この希な試みに挑戦した思想家の一人である。彼女は労働を人間形成の原理とみてその全体像に迫り、重層的な構造をもつ独自の労働思想を構築したのである。

その思想の足跡をたどる時、1934年から翌35年にかけてなされた工場労働の体験が、彼女の視点の変化をうながす契機となった点で、圧倒的な重要性をもつことを見逃すことはできない。それまでの彼女は労働の現状を批判的に検討しながら、人間的で創造的な労働がいかにして可能であるかを問う姿勢を示していた。つまり労働の肯定的な面を追求していた。しかしこの体験の後、彼女の関心は労働の否定的側面の方に移っていき、この苦役、この非人間的な労働をどのように受けとめるかが主要関心事となる。

非人間的な労働に関する彼女の思索の成果は、1940年以降の作品に様々な形で散見される¹⁾。では、そこではこのような労働は、どのように評価されているのだろうか。呪われた労働として低く評価されているのか、それとも別の観点からとらえ直され、高く評価されているのか。シモーヌ・ヴェイユの労働に関する従来の研究では、こうした疑問に答えることはできない。

そこで本論では、後期の作品の検討を通してその点を明らかにしたいと思う。そのために第1章では、人間的な労働と対照させながら非人間的な労働の特質を見、次に第2章では、ヴェイユにおける非人間的な労働の受容について考え、最後の第3章で、非人間的な労働の意味とその受容をめぐっての彼女の思想をとりあげることにする。

1) 大沢正道『遊戯と労働の弁証法』紀伊國屋書店、1979、p.64.

2) なかでも重要なのは、*Cahiers* (以下 C) I, II, III, *La Condition ouvrière, La Connaissance sur naturelle* (以下 CS), *L'Enracinement* (以下 E), *Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu* (以下 PSO) の諸作品である。

I

ヴェイユの労働思想は工場体験を契機として、それ以前と以後とに大きく分けて考えることができる。これを便宜的に前期の労働論、後期の労働論と呼ぶことにする。前期の労働論はデカルトの二元論やアランの自由観、マルクスの社会・労働思想をとり入れながら、彼女独自の考えを展開したもので、労働は自由を実現する活動として表象される。この場合の自由は世界全体の必然性に関連させて考えられており、自由とは自然の必然性を法則として認識し、それに基づいて自然を統御することであると定義される。このように人間が思考によって必然性をとらえ、自らの生存条件を再創造していく行為＝労働に、彼女は神の能力の人間的等価物を認めている。

この自由で創造的な労働には、精神を能動的な存在、物質を受動的な存在ととらえ、人間による自然の支配を目指すダイナミックな近代的人間観がよく現われている。また労働を規律の源泉にするという考え方も見られ、これは怠惰を罪とし、労働を神の召命としたプロテスタンティズムの職業倫理に通じるかと思われる。しかしヴェイユの場合は、知性による必然性の認識に力点がおかれ、その結果、精神が自然だけでなく肉体をも支配すると考えられているので、むしろソクラテスの主知主義の方にはるかに近いと言ってよい。そこでこの労働論は、知性を軸とした自由な労働を理想としている点で、主知的な労働観だといえる。

彼女の主知的な労働観は実際の労働体験を通して、ほぼ全面的に否定される。現実の労働者はほとんど自由裁量権を与えられず、人間としての誇りを奪われ、命令を実行するだけの奴隸的な存在に墮していたのである。この重い体験の後、彼女の関心の比重は労働の過酷な面へと移る。そして彼女の後期の労働論は、労働の非人間的な側面をめぐって展開されることになる。

ところで、労働の非人間性が問題になる時、労働に対して二通りの見方が可能だと考えられる。その一つは、労働は本来自由な活動であるはずなのに、労働をとりまく環境に問題があるために、労働が奴隸的なものになっているという見方である。初期のマルクスはこの見方に立って労働の尊厳を説き、資本主義を徹底的に告発した。ヴェイユはマルクスの自由な労働という表象を受けつぐが、理想的な労働を実現するにあたっては全く別の方向をとる。彼女は、労働の矛盾は経済の領域ではなく、労働の場で解決するべきだと考え、そのためには労働管理と技術の全面的な変革が必要であると主張する。そして自由な労働を実現するための処方箋を書いている。それによると、

例えば、技術がそれを可能にするところでは [...] 労働者が分散させられ、各人が家とささやかな土地と機械とを所有するようになれば、 [...] また労働

者たちがしばしば、自分たちの製造した部品が他のすべての部品に組み合わされる組立て工場へ実習に行く機会がもてれば、[…] これに給与上の有効な保護が加わった場合、プロレタリア階級の不幸は消滅するであろう³⁾。

彼女の理想とする労働者像は、自分の腕に誇りを持ち、ものを作る喜びを知っていたと想像される中世の職人に限りなく近いものである。労働条件に関する彼女の指摘で重要なのは、効率といった生産上の利益ではなく、生産する人間の立場を第一に考慮した技術変革の視点をうち出したことである。安全で、しかも人間が主役となって使いこなせる機械、すなわち人間的な機械の視点を提起したことで、これは一考に値すると考えられる。

労働のもつ非人間的な面について、彼女にはもう一つの見方が存在する。それは、肉体労働には本質的に隸従の要素が内在するという見方である。彼女によると、その要素は次の二点にしばられる。一つは、労働は遊びとは違って、それ自身が目的として追求される活動ではないということ、つまり望ましいから行なわれるのではなく、生活するためにやむなく行なわれる活動だということである。もう一つは、労働において人間は自らも生産手段となり、物質の次元を生きるということである。精神的で能動的な存在である人間が物質と同じように時間に従属しなければならず、これは人間の本性に反している。

ここにあげられた事柄は特に新しいものではなく、ある意味では古くから言われてきた事実の確認である。しかし現代では、この明瞭な事実を直視することが非常に困難になっている。というのも、今村仁司氏がその著書『仕事』で鋭く分析しているように、近代は労働社会の出現によって特徴づけられ、近代を肯定的に受けとめることは労働を肯定的に受けとめることにつながるからである。

このことをさらに詳しく考察すると、近代以前には、労働と精神活動とは厳密に区別されて考えられていた。ところが近代になって、科学の成果が労働に適用されるようになると、労働は自由を実現し、富を生む活動として評価されるようになる。一方精神活動は、労働と同じ性格をもち始める。例えば、ヘーゲルは精神活動を「精神の労働」だと考えたが、それを受けついだ若きマルクスは視点を逆転させて、労働こそ精神活動だと解釈するに至った。このように労働と精神活動の区別が曖昧になり、相対的に労働の評価が上昇し、精神活動の価値が下落するのが近代以降の特徴である。

こうした近代的な思想の流れの中で、ヴェイユは徐々にその流れから脱却し、いわば古代的な労働観の真理に目覚めていく。古代的な労働観とは、労働は生命

3) Simone Weil, E, Gallimard, 1963, p.52.

維持という自然の必然性の領域にあるから自由な活動ではない、奴隸にこそふさわしい活動だとする見方である。さらに古代的な労働觀には、労働の過酷さを懲罰として表象する見方もあり、それは例えば、ヘシオドスのプロメテウスの物語や旧約聖書に表わされている。彼女はこうした見方に真実が含まれていることを認め、懲罰の表象については特に『創世記』に注目している。そして、「『創世記』における罰は、死は別として、何よりも服従が課せられたことにある。労働と死。[...] 労働はどことなく死に似ている⁴⁾」と言う。

彼女は労働を罰ととらえることで、古代人と同じように呪われた活動とみるに至ったように思われるが、その真意はどこにあるのだろうか。労働を卑しい行為だと考えるようになったのだろうか。その点に関しては第3章で扱うことにして、ここでは、彼女が労働の非人間的な性格について熟考を重ねた結果、労働を罰として、一種の呪いとして認めるようになったことを確認しておきたいと思う。

それでは次に、このような非人間的な労働を受け容れる道があるのかどうか、その点についての彼女の考えに迫ってみたい。

II

シモーヌ・ヴェイユは、執着を断つ、すなわち解脱の觀点からバガヴァド・ギーターを参考に、人間の行動の三段階を構想している。そこでこの三段階の行動に照らして、労働と人間のあり方を考えてみる。

彼女の理解によると、人間の行動の第一段階は、自然の欲求や情念などによって衝動的に行動することで、これは盲目的な行動ということができる。第二段階は、ある目的に達するために意志を用いて自覺的に行動することで、これは能動的な行動だといえる。第三段階は、現実を明瞭に認識し、必然性の促しをうけて行動することで、これは受動的な行動だといえる。この3種類の行動は第一段階から第三段階の方向へ進むにつれて、解脱の程度が高くなる。

社会的な觀点で見ると第二段階の能動的な行動が重視され、称揚されるが、それはこの行動が自己表現とか、普通言われる自己実現と結びついているからである。ところが解脱の觀点に立つと、一見消極的で無氣力ともとられかねない、第三段階の受動的な行動が評価される。そこでは特定の欲望にとらわれることがなく、どのような物によっても充足することができるからである。欲望と必然性(=現象が生じる諸条件の連鎖)の関係について、彼女は次のように考えている。

4) Simone Weil, CS, Gallimard, 1964, p.316.

人がある一つのものを望むなら、一連の諸条件の支配に服することになる。だが条件の連鎖そのものを望んだ場合、この欲望の充足は条件づけられないものになる⁵⁾。

すなわち人が特定のものを望むなら、その欲望は特定の条件のもとで充たされるが、欲望を必然性全体に拡げた場合、どんな条件のもとでも充たされ得るというのである。

ここで、3種類の行動を欲望に即してもう一度整理すると、盲目的な行動は何にでも執着し、最も欲望にとらわれている。能動的な行動は目的を設定するという点で、特定の欲望にとらわれている。受動的な行動は何物にも執着しないので、いいかえると必然性全体を望むので、欲望から最も解放されている。この受動的な行動は外見上、何にでも執着する盲目的な行動と非常によく似ている。両者の違いは内面的態度にあり、個物に執着するか、個物より上の次元にある個物が生じる諸条件に執着するかという点にある。以上が彼女の考える、解脱に至る三段階の行動である。

この三段階の行動に照らして労働と人間のあり方を見ると、自由な労働は明らかに第二段階の能動的な行動に対応する。では、非人間的な奴隸的な労働はどうだろうか。ここでもう一度、奴隸的な労働の特質を思い出してみると、それは何よりも生命を維持するための手段だった。ヴェイユ流に言うと、「善のためにではなく必然性に迫られて、[...] 何かを獲得するのではなく、自分の存在をそのまま保つために努力すること⁶⁾」だった。このような労働に従事する人は、生きるために空しく疲労することになる。この空しさにどのように対応するかによって、奴隸的な労働は第三段階の受動的な行動に質的に転換することもあれば、第一段階の盲目的な行動に転落することもあり得る。そのことを彼女は、「しばらくの間真空に耐える人は超自然的な糧を受けとるか、墮落するかである⁷⁾」と説明している。真空に耐えることが、労働の苦痛を意味のあるものにすることができるかどうかの試金石になるのである。

そこで、どのようにして真空に耐えるかが問題になる。その方法について、彼女はギリシア思想から靈感を得て、それをキリスト教の光のもとで解釈している。次にその点についてみていく。

彼女の洞察によると、古代ギリシアは同じ一つの靈感に充たされていた。

5) *Ibid.* p.94.

6) Simone Weil, C III, Plon, 1956, p.276.

7) Simone Weil, C II, Plon, 1953, p.23.

[…] 古代人を真に陶酔させた考えは、物質の盲目的な力を従わせるものがそれよりさらに強い別の力ではないということだった。それは愛だというのである。彼らは物質が永遠の知恵に従うのは、物質に服従を同意させる愛の徳によると考えていた⁸⁾。

宇宙が、限界づける力、ヴェイユによると愛の力によって運行されているという考えは、プラトンを初めとして何人かのギリシアの思想家に見られるが、彼女は真空に耐えるという実践的な要請から、特にストア派の運命愛に注目する。彼女の考察によるとストア派の運命愛の真髄は、「世界の秩序は、それが神への純粹な服従を表わしているという点で、愛されなければならない⁹⁾」と考える点にある。この考えを我々の生活に結びつけていうと、我々の生涯の間に起こるすべての事柄は、この宇宙が神に服従していることから生じたものであるから、例外なく一切を受け容れなければならないということである。

ここで言われている世界の秩序とは、先に行動の三段階のところで触れた必然性の全体に相当する。知性の次元では条件の連鎖、すなわち必然性ととらえられるものが、より高い次元では世界の秩序と見なされ、人間にとって愛し得るものになると彼女は考えているのである。その一方で彼女は、こうしたストア派の運命愛がキリスト教とも両立すると考えている。その根拠になるのは、マタイ福音書の「天の父は悪い者の上にも良い者の上にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせる」(5. 45) という箇所である。彼女はここに、存在するものをすべて受け容れよと説くストア派の思想が包摂されているとみるのである。

さらに、彼女は運命愛を極限まで追求した結果、キリストの従順の中にそれが見事に開花しているのを観取している。ビリピ書に、キリストが己を空しくして人間の形になり、己を低くして十字架上の死に至るまで従順であったと説かれている箇所がある(2. 7)。彼女によるとこの箇所は、神がこの世界を支配する必然性の働きをねじ曲げようとはせず、まさしく終局に至るまで必然性に服従したことを明かしている。だから我々もこの無力な神を模範にして、「神が自らの神性を空しくしたように、我々はもって生まれた偽りの神性を棄てなければならぬ¹⁰⁾。」これが必然性に対してとり得る道なのである。具体的にはどうするかというと、「思考によって我々はこの世の王、主人になっている。この神との類似性を棄て去ること¹¹⁾」である。思考力を放棄することで、我々は物質と同じように

8) Simone Weil, *E*, p.244.

9) *Ibid.* p.244.

10) Simone Weil, *C II*, p.116.

11) *Ibid.* p.123.

時間に従属し、必然性がもたらすものを受け容することになる。

以上のように考えることで、彼女は空しく疲労する労働、呪われた奴隸的な労働を受け容する道を開いたのである。それは、運命愛によって宇宙の秩序を、知性にとては必然性の全体を受け容れることから成るが、それはまた同時にキリストを模範とし、その従順に倣う道でもあった。

それでは次に、呪われた労働を受け容れることにどのような意味があるのかという問題について考えてみたい。

III

シモーヌ・ヴェイユは労働の非人間的な側面を熟考する過程においても、労働は人間活動の基本であるという考え方を決して放棄しなかった。いいかえると、呪いともうけとれる労働を卑しい行為だとみることはなかった。そのことは、『創世記』の楽園追放の物語に言及した時に、「この物語にわずかでも労働に対する軽蔑を読むならば誤りである¹²⁾」と断言していることからもわかる。彼女は労働重視の立場を貫くことで、罰についての深い意味を洞察するに至っている。

それによると、古代ギリシアから中世に至るまで肉体労働が蔑視され、奴隸にふさわしい活動だと見なされてきた原因の一つは、罰の意味が正しく理解されなかったことによる。実際「真の刑罰とは、ある人が犯罪によって善の外に出た場合、苦痛を介して完全なる善の中に復帰させることである¹³⁾。」つまり刑罰には、懲らしめという性格の奥に、治療・救済という性格が隠されているのである。彼女はこの洞察の上に立って、『創世記』の物語は労働に対する軽蔑を示しているのではなく、また労働は真の意味で呪われているのではなく、人間を善の中に引き戻す方法、すなわち救済の道を示していると考えるのである。そして、そのあたりの事情を次のように説明する。

人間は服従の外に出てしまった。神は刑罰として労働と死を選んだ。したがって、労働と死は人間が同意によってそれに服する時、神への服従という最高善の中に移行することを意味する¹⁴⁾。

こうして労働は、人間が自己を棄てて神に服従する行為、宗教的行為となる。生命的必然の領域に属していた労働が同意=自己否定を契機として、祈りや瞑想

12) Simone Weil, E, p.251.

13) Ibid. p.254.

14) Ibid. p.254.

と等しい価値をもつ行為となるのである。

ところで、「人間が服従の外に出た」というのは原罪をさしていると思われるが、原罪は彼女にとってどのような意味をもつのだろうか。労働の宗教的な性格をより明確に把握するために、彼女がキリスト教の光のもとで、労働をどのようにとらえたかをさらに掘り下げてみておきたい。

彼女は原罪の意味をつきつめて考え、創造そのものと結びつけて理解している。それによると創造とは、神とは別の存在が造られ、その存在に見せかけの自律性が与えられたことを意味する。すなわち「神は創造するときに罪の可能性を造った¹⁵⁾」のであり、その時すでに「アダムは自らの意志をもっているという事実により、罪の状態にあった¹⁶⁾」のである。注意すべきことは、彼女にとって原罪とは罪を犯す可能性という状態であり、決してタブーを犯すという行為ではないということである。

こうした重い原罪理解の上に立って、彼女は「とりなし」としてのキリストの役割にも独自の角度から光をあてて、次のように解釈している。

償うとは不正に取ったものを返すことである。人間は自由意志を [...] 盗み取った。キリストは服従を教えることによって、それを返したのである¹⁷⁾。

したがって、罰としての労働をヴェイユ神学によって解釈すると、永遠の世界で犯された罪を人間が時間の世界で償うために与えられた救いへの道ということになる。こうして労働に、原罪の償いという意味が加わり、労働はキリストの贖罪に与る行為となる。人間は微力ながら、労働を通して自分の意志の一部を神に捧げることにより、キリストの贖罪に参加することができる。パウロはキリストの贖罪を、神と人間、神と世界とを和解させるいわば第二の創造だと考えたが、ヴェイユの理解では、労働はまさしくこの第二の創造に参与する道となるのである。

そこで労働と第二の創造について、彼女の考え方のアウトラインをたどってみよう。彼女は聖体の秘跡に照らして農作業の神秘的な意味を洞察し、そこから肉体労働一般の意味を類推している。彼女の理解によると、「キリストは死に臨んでパンとブドウ酒を選び、その死後、日々世紀から世紀を通してその中に化肉する¹⁸⁾」と言ったが、実際、太陽の光が象徴的に示している—太陽の光は植物に結晶化さ

15) Simone Weil, C II, p.78.

16) *Ibid.* p.196.

17) Simone Weil, CS, p.169.

18) Simone Weil, *Le Christianisme et la vie des champs* in PSO, Gallimard, 1968, p.25. 同様の考えは、C I, Gallimard, 1970, p.225などにも見られる。

れ、食物として人間に食べられる一ように、神は毎日物質となり、人間に食べられているのである。

一方労働者は、日々の労働を通してエネルギーを消費し、製品を作るが、「ある意味では自分の血と肉を製品に変えているといえる¹⁹⁾。」働く人、特に農民はこの類比を深く心に刻んで、自分の血と肉をキリストに捧げようと望み、それらが意志の支配を離れて受動的な物質と化しているのなら、密かな聖変化によって、キリストの血と肉になることができる。なぜなら神は我々の中で働くために、自分にエネルギーをさし出してくれる人間を求めていたからである²⁰⁾。これが彼女の考える創造への参与である。つまり先に述べた神への服従としての労働は、ヴェイユ神学では、有限な人間がキリストの贖罪に参与する道であり、さらにそれは第二の創造に関わる行為となる。そしてこの第二の創造において、働く人の肉体の一部は聖変化をとげて神の道具となるのである。彼女は肉体労働にこのような神秘的な意味を担わせて、それをあらゆる活動の最上位におき、「肉体労働は社会生活の靈的中心でなければならない²¹⁾」と結論したのである。

シモーヌ・ヴェイユは非常に厳しい、また神秘的な道を通じて、肉体労働を聖性に結びつけることに成功した。だが、この聖性に至る道は一般の人間には近付き難いものである。もし労働が儀式や神話と融合し、詩情 (poésie) に包まれるようになれば、労働と聖性の結びつきはもう少し現実的なものになるかもしれない。とはいっても、すべての活動が均質化され、計量化される傾向にある現代においては、ポエジーに包まれた労働を実現しようとすれば、坐礁する可能性が大きい。

こうした問題点があるにもかかわらず、彼女が労働を徹底的に省察の対象とし、その否定的側面からも目をそむけなかつたことは、高く評価されなければならない。というのも、今日ではキリスト教神学者であっても『創世記』の物語を、すなわち呪われた労働の真の意味を深く考察することなく、一面的に労働を肯定し、称揚する傾向が見られるからである²²⁾。ヴェイユの提示した道は困難でも、その神秘的・宗教的な労働観は労働の性格と全体像とをとらえる上で、大きな貢献をしていると言つてよい。

(追手門学院大学非常勤講師)

19) *PSO*, p.25.

20) この部分の考え方特に、*CS*, p.144に表明されている。

21) *Simone Weil, E*, p.256.

22) 例えば、M.-D.Chenu や Emil Brunner など。